詩集 昔日

守屋主一郎

詩集 昔日

守屋主一郎

昭和廿年十二月十二日

裝幀　中込　晏

目次

影……三
想ひ……四
神戸……五
花ざくろ……六
つばな……七
砂山……八
赤い月……一〇
在る……一一
ふれぢあ……一二
風ぐるま……一四
おじぎ……一五

搭車（トーチャ）の足音……一六
秋……一八
山　彦……一九
焼　跡……二〇
雨よやはらかに……二二
父……二三
霧……二五
葛……二六
海をうつ雨……二七
むらさきの花……二八
歓　会……二九
望　郷……三〇
青花壺のうた……三一
青磁碗のうた……三二
粉　雪……三四
夜の雪……三五
遊　泳……三六
逢ひたい人……三八
おしげ……四〇
安東思慕……四三
1　連（れん）　翹（げう）……四三
2　すみれ……四四
3　あかしや……四四
4　り　ら……四五
5　ねちぁやめ……四六
6　野　菊……四七
7　月見草……四八
8　柏……四九

落　葉……五一
森の径……五三
さふらん……五四
虫……五六
ひるの月……五八
はるけき人を……六〇
薔薇は白い……六三
赤柱半島……六四
菜　園……六六
祖　国……六八
波にぬれ……七一
翳……七三
動かぬ戎克……七五
さくら……七九
合歓木……八一
街　角……八三
ああみんな……八七
はつ夏……八八
昔　日……八九
流　れ……九一
しらぬ人……九三
瞳……九四
黄すげ……九六
「昔日」上木記……伊福部隆彦

―― 跋に代へて ――

詩集

昔日

影

日の光は
せつかちに走る雲をもれて
夏草茂る箱根の山に影を流した
ほの明るいしづかな影は
見てゐる間に
ふもとから頂上へ
さうして山を越えた
山を越え湖を越えて
遠い処へ行つて了つた

大正九年八月

想ひ

おもひは早く走るもの
しかしその想ひとて
山越え河越え
青いひろい海を越えて
お前のむねに行くまでは
どんなにさみしい旅をするであらう

大正九年八月

神戸

神戸みなとの夏のひる
何かしら心せはしい波の色
あの船は遠い旅から帰つたさうな
赤い船腹の重い息づかひ
あれ風むきが変つた
ランチの煙が吹きつける

大正九年八月

花ざくろ

久しく座るに耐えかねて
人知れず少し膝をくづせば
庭に咲く
紅いさみしい花ざくろ
しみじみと眼にはしみたれ

大正九年八月

つばな

砂山のかげ
銀色のつばな
風になびきて
海の音
かすかにすぎ行く

大正九年八月

砂山

大正九年八月

さくり　さくり
砂山を越えて海に出た
海を見て
又砂山をこえて歸つてきた
つぎの朝早く
同じ砂山のふもとへ来た
昨夜は風もなかつたのに
きのふの足跡は消えてゐた
足跡一つもない

みわたすかぎりさみしい砂山だ
さくり　さくり
又砂山にのぼつて行つた
ふりかへると
足跡が一線こゝまでつづいて
朝の陽にかがやいてゐる
やがて消えて
あとかたもなくなつて了ふものとは
思へないやうだ

赤い月

大正十一年三月

赤い月
地平線に生れた月
いよいよほの暗い草むらに
蛙がしきりに鳴いてゐる
なやましい　せんだんのかほり
今　夜更けて
地平線に赤いさみしい月が生れる

在る

大正十一年三月

あるからつかまへようとあせる
つかまへようと手をさしのべると
それにとらはれて了ふ
腕ぐみしてゐれば
在るけれど　なんにもない

ふれぢあ

大正十一年三月

素焼の瓶に三つふれぢあが咲いてゐます
細つそりしたみづみづしい姿
静かにそゝる匂ひ
そつと唇を近づけました
私はその時ながく忘れてゐたことを
こゝろの痛むばかりに想ひ出しました
草原を吹いて行くそよ風のやうに
海のみなもに降る雪のやうに
南椽の小窓に映る小鳥の影のやうに

とらへがたないそのものを
そのまゝそつと忘れて了つてゐたのです
ふれぢあよ
みづみづしい姿
静かにそゝる匂ひ
私は想ひ出しました
捕へがたないその想ひを

風ぐるま

大正十一年五月

色紙でつくつた風ぐるま
風が吹くと一齊に
からから快活にまはる
風がやむと
一齊に靜まりかへる
風が吹いてもまはり出さない——
風がやんでもまはりやめない——
そんな風ぐるまは一つもない
だけれど　それではつまらない

おじぎ

大正十一年八月

本をふせて想つた
その人の前に立つて
こゝろから
わるかつたかんにんしてくれと
云はずにはゐられぬ人の
たくさんあることを想つた
そして
今はどこにどうしてゐるかしらぬその人々に
ひとりひとり眼をとじておじぎをした

搭車（トウチヤ）の足音

大正十一年八月

ひんやりと
夜更けの街を歸るとき
ひたひた
早い搭車の足音が
明るいさみしい舗道に
ひびくよ
新公園のアークライトが流れるよ
走る走る
あふるゝ夜氣に

それとしもない脳油の匂ひ
ひんやりと
夜更けの街を歸るとき
ひたひた
搭車は走る走る
一体私はどこへ歸るのだらう
搭車よ
さうむきに走るな

秋

大正十一年十月

うらの畑の葡萄はみんなとりつくされた
柿の實ももう一つもない
急に秋がさみしくなつた
とるのが惜しいのではないが
紫のぶだうは二房ばかり
赤い柿も三つ四つ
せめて梢に残して置けよ

山彦

大正十二年一月

ひはかげる
はるかに遠き
人の名を
よべどはかなき
山彦の
消えて跡なき

焼跡

大正十二年九月

ちまたの石ころまでも
くろこげに焼けたり
みわたすかぎり
みやこのなきがらの寂しさよ
人あまた歩みをれど
もはや驚きも見ず
また哀しみも見せず
ひたすらに
歩み歩みつづくる

ちまたのなきがらに日は照り
やがて
雨はそを濡らせども
ひたすらに
人は歩みつゞくる
ああ　かれらいまいづこに行く

雨よやはらかに

大正十二年九月

焼あとに草が生える
おもひがけない
そのみどり
雨よやはらかにふりそゝげ

父

大正十三年十月

山の手の廣き街を
父とつれ立ちて歩めば
父はそこはかとなく母のことなど語り出でたり
寒さに向ひしものか
いつもの如く手くびが痛むとよ
何ごともなすな　やすみてあれよと云ひても
ひまさへあればすすぎし飯をたくとか
鬢も白し
母の老　今　眼に見ゆるかな

よき邸なりと指さすを見れば
いかめしき鐵の門もあり
玉川礫(いし)など静もりて
たけ高き塀の内椎も茂りてゐたり
やがて冷き薄陽(うすび)さし出で
父の黒き中折の埃も見ゆ
われの幾年か　かむり古した帽子を
これでいゝぞよとてかむり歩くなり
疲れずやと問へば
夜汽車で眠られざりしためやゝ疲れたり
もはやおれは歸りて休まむ　では行つてこよと
折から來れる乗合自動車にうちのりて
われの勤めに行くを見送るなり

霧

谷間に涌く霧は
白いやはらかい霧は
いつの間にか
峯の樹々をつゝんで了ふ
どこから涌くか
明るいさみしい盲の霧は
こゝろを
ひとりのこゝろを
包んでしまふ

大正十五年十月

葛

昭和三年十二月

われは知る
風にうらがへる葛の葉の
こもれる籠れる激情を
さはさりながら
風吹かば
おのづからうらがへる葛の葉を

海をうつ雨

昭和七年九月

海のみなもをうつ小雨(こさめ)
しま山にかかるくも霧
かの島なみのかなたにも
雨にうたるゝ海のつゞくや
愁のはてぬ海のつゞくや

むらさきの花

昭和七年九月

まことこれ
きみこそは知る
ゆきづりのざれごとならずと
はるかなる君よ
ゆるせかし
桔梗はむらさきの花にして
かの日の君を見しゆゑに
つひにわれふた心あらむや

歓會

昭和七年九月

何かわるいことをしてゐるやうな
どこか心の底にたよりなさを
たゝへながら
涌き涌くこのよろこびをどうしよう
眼にしみる桔梗の花

望郷

昭和七年九月

わらびのかれきふみしだき
山こえゆかばたびびとは
ななめひになみだながしつ
風にながるるわたり鳥
北にむかふと想ふなり

青花壺のうた

昭和十年七月

明代南方支那の民窯で焼き上げられた大ぶりの染付の壺で、耳付のあたりから裾まで野菊が奔放に描かれてある。毎日雲鶴や火竜や西域模様ばかり描いてゐるのに飽いてゐたその陶工はふと眼に入つた爽秋庭前に吹き乱れる野菊の花をじつと見つめつつ、すなほに出来上つた素地壺の一つを手にとり、ありのままに写してみたものであらうか。その名もない、しかしすぐれた陶工の風懐やそのあたりの風物がおのづから数百年の年月を閲して、いよいよはなやかに沈みひそむ呉須の色に出て、今、そくそくと人に迫つてくる。耳を澄ませば野を渡る秋風が聞えてくる。

よるとも朝ともわからぬ
幽明の野末に
ぼうぼうと風がふいてゐる
ぼうぼうたる風の中に立つて
人はゆくてをながめた
足もとに咲きみだれる野菊を忘れ
悠遠の切なさに心を嚙んだ

青磁碗のうた

昭和十年九月

河は山を繞つて流れる
楊はほのぼのと芽ぐんだ
はねつるべがゆるやかに空を切つてゐる
ああこの形象を超えたもの
素朴にして犯し難い
間が抜けてゐて高貴な
おほまかな
冥想的な
東洋の熱情を
一碗の天地に盛つたものは誰か

粉雪

こゆき　こゆき
しみる粉雪
こゝろにしみる夜の雪
しづかなる
もち月の翳

昭和十一年十二月

夜の雪

ほてる頰に
雪は冷たきものならず
山の端(は)は
ほのぼのと月あかり
この掌にうけとめん
音なき風に
流るる粉雪を

昭和十一年十二月

遊泳

昭和十二年一月

いつか夢の中にゐた人だが
うす明るい水の上を
たくみに抜手をきつて
追ひつめてくるので
つかまるまいと逃げまはつたのだ
愉しいたはむれごとのやうでありながら
何か真剣さがさし迫つて
人氣ない湖の上を
一心に泳いだ

両岸は
ありありと立ち枯れの密林であつた

逢ひたい人

昭和十二年一月

逢ひたい人がゐるのだが
たしかに一度は逢つたのだが
名前も知らないし
男だか女だかはつきりしないのだが
とにかくもう一度逢へば
何事もよくわかると思ふのだが
今夜こそはその人にあはうと
毎晩はやくねむるのだ
夜中にめがさめて

うす明るい窓硝子に
むなしい身のまはりを感じ
一と筋に
昔からつづいてゐるさみしいものが
ありありと眼に見えた

おしげ

昭和十三年十二月

わかれしは昨日
雪ふる日
また逢はん日の
ありやなしや
とにもかくにも
身ひとつに
生くるこの身ぞ
おのづから
くらき運命を

知りつゝも
うべなひかねつ
わがこゝろ
いとしおのこよ
ゆるせかし
微熱にうるむ
かのひとみ
あやしく光るを
ふりすてゝ
などかはえ行きそ
憑かれしは
同じ運命の
現身ぞ
かたみにむせぶ

涙さへ
ひそかに甘きを
ゆるせかし
いとしおのこよ
花うばら
咲く春の日の
ありやなしや
はかりかねつも
うちふるう
女ごゝろの
かなしさを

北国におしげと呼ぶ唄女ありあまりに
悲しきこゝろ抱き居れば

安東思慕　八唱

昭和十六年一月

遠く去りては又何時の日か逢はむ山河そ思慕の情切なり

1　連翹

手にとれば
か細い一茎の花ながら
こもれる季節の情熱に
まるい黄い
焔となつて
山腹の枯木に火をつけてゐる

2　すみれ

かれ芝の床に
ふかぶかと
いま
プリンセスの
お目ざめです
濃い紫の
この小さい冠を
どなたも
踏んではいけません

3　あかしや

ほのかに匂ふ
夕月の
梢がくれに
ふさふさ
白く重く
うつゝなく
あかしやの花の
しづもれる

4　りら

きり雨に
舗道はひかり
はるかなる

陸橋のふもと
シグナルの
灯もつきそめし
かはたれぞ
濡るゝがまゝに
りらの花
うすむらさきを
むしりとりつゝ
黙すこゝろを
よき人よ
語れと云ふや

5　ねぢあやめ

名も知らぬ
ところもしらぬ
さりながら
そのおもかげの
忘られぬ——
かゝる
人の想ひこそ
つゝましく咲く
野のねぢあやめ

6　野菊

あの径(みち)を
露にぬれながら

何かこゝろ愉しく
のぼつて行けば
おどろなる
朝やけに
野菊の花の
沁みる白さよ

7　月見草

深い霧の朝でした
うら山径をゆくと
たつた一つ
小さい月見草が咲いてゐました
白樺の葉は落ちつくして

厚い外套がほしい朝でした
朝蟬が鳴いてゐたかしら
夢ではありません

8　柏

凛烈の冬空に
黒く骨ばつた肩を張り
流れ行く幾年月
さまざまの雨風に
尙且つ
生き抜いて来た落ちつきが
きかぬ氣魄が
山を壓してゐる

だが
この古武士は
枯葉の鎧を
いつまでもぬがうとしない
頑固者だ

落葉

時くれば
おのづから
おち葉する
樹々ながら
わが想ひ
などかくは
はるかなる

昭和十七年七月

森の徑

昭和十九年六月

森の中に徑があり
雨はびしよびしよ降つてゐる
みちは雨と樹木の中に消えてゐるが
足もとの下草だけはほの明い
濡れた木の肌は何かに似た匂ひがして
いく度も嗅いだことのある
その匂ひを想ひ出さうとした
ふり返つて
みちづれに尋ねたのだが

よく言葉が通じない
年若いみちづれは
霧にぬれた睫毛を昂げて
歩けるまで蹤いて行きますと
とんちんかんのことを
しかし一心に
その瞳は云つてゐる
あゝ寒くならねばよいが
森のみちは
どこまで續くのだかわからないのだから

さふらん

昭和十九年六月

あさな　あさな
きみとあひみし
さふらんや
むなしきまでに
しみとほる
うすむらさきの
花のいろ
いまはるかなる
かの空に

またはるかなる
かの朝に
ふたたびきみと
相見んや

虫

昭和十九年八月

そうそうたる秋風に向つて
虫が鳴いてゐる
すきとほる五体をふるはせて
虫は一心に鳴いてゐる
私は想ふのだが
虫には虫に私の知らない愛情があつて
　雨はあがつた
　秋風が白く見えるぞ
と虫にささやくのでもあらうか

虫はうす青い翅をすり合はせ
昔からつゞいてゐる
その愛情の切なさに
冷い肉身を
か細い一茎の露草にぶちつけて
ひたすら鳴くのでもあらうか
私はいま秋風の野に立つて
わきわく虫の聲にかこまれて
虫よりも秋風よりも
その冷徹な且つ斷ちがたき
愛情に耳をすました

ひるの月

昭和十九年八月

よもぎの原に
はらばひて
青きりんご
かみつゝ
そこはかとなく
かたらひし
よき人の子よ
いまいづこ
ふりさけみれば

うつゝなや
そらには浮ぶ
晝の月

はるけき人を

昭和十九年八月

・

はるけき人を
想ほへば
入り日に蔭る
山襞の
こゝろにしみて
近きかな

・

はるけき人を

おもほへば
ちゝちゝと鳴く
鶸(ひわ)どりの
風に流るる
うつゝなさ

・

はるけき人を
想ほへば
山脈(やまなみ)の端(は)は
月明り
わが跫音ぞ
うつろなる

・

はるけき人を

想ほへば
わが頬にふるゝ
こな雪は
いのち冷き
ものならず

薔薇は白い

昭和廿年六月

ひとの不實を憤ることも
おのれの真實に醉ふことも
ほゝけ忘れて
薔薇は白い
雲は
さらにさらに白い

赤柱半島

昭和廿年十一月

野芝は枯れて
肌さむき風
丘を吹き行く
きのふの日
われらたゝかひに
いそしみしこと
茫として
昔日のことなり
こゝろほゝけて

破れしことも
しみて思はず
たゞいたづらに
いみじくも
はらのへるを覚えつゝ
抑留所の
石壁によりて
野芝の丘を
すぎ行く風に
聞き入るなり

菜園

昭和廿年十一月

われら許るされたれば
おのがじゞ
二三坪の曠地を拓き
くろき菜種を播かんとす
太陽よ
暖に照れ
海風も
あらくな吹きそ
われらいと乏しけれど

朝なあさな
己が使ひ水をわかちて培ひ
こゝろいとしく
青々と育つ日を待たむ
あゝこれがいま
われらの喰ひうる
また
われらの願ひうる
たゞ一つの日光なればなり

祖國

こゝにはないが
遠いところにある
私の心像だ
たとへ假説にしても
人間が創りうる
美しい假説だ
たとへ空しい約束にしても
花が散るやうに
切ない約束だ

昭和廿一年四月

あまりにも孤獨な
あまりにも
想ひを凝らした山河だ
しかしそれは
あるがまゝの寂凉たる山河ではない
山河の記憶だ
山河への精神だ
流れ去つた時のごとく
こゝにはないが
遠いところに在る
私の山河だ
私に何物をも望まず
私を好きとも嫌ひとも云はず
じいつと祖達(ごやたら)の感情がふるへてゐる

私はこの拒否しがたいものを
もはや血筋だけでは動かし難いものを
静かに
情愛を籠めて
月の翳りにすかして見るのだ

波にぬれ

かなしきは
とらはれびと
ひねもす
波にぬれ
うみ藻かりつゝ
想ふはたゞ
放たれて帰る日
さはされど
幻のふるさと

昭和廿一年四月

ありのまゝに
ありやなしや
遠き想ひびと
昔のまゝに
ありやなしや

翳

どこからくるかわからぬ
霧のやうな陰翳であるが
それと氣がつけば
それと知られる
和かな眼差しに
絶えず
いろいろの想ひを湛へてゐた
白い手で
髪をかき上げたり

昭和廿一年四月

眼をほそめて
遠い地平をながめたり
ごく親しいけはひが
私のこゝろにしつとりとしみた
話しかけようと思ふのだが
つかひ古した地上の言葉が
いかにも見すぼらしくて
いつも私は
草の葉のやうに黙つてゐた

動かぬ戎克

昭和廿一年五月

抑留所は岬の突端にあつて
私は毎日海を見て暮した
岬は岩ばかりだが
時のうつりに
野苺が紅く實(みの)つたり
ひる顔がさみしく咲いたりした
海は
ある時は青黒く
まだらの雲の影を流し

ある時は灰色の平面に
波穂が白い縞を織つた
戎克(ジャンク)は少しも進まず
時々かかはりのない飛行機が
なゝめに空をかすめた
さうして
水平線はいつも遠く
歴史のやうに
手のとゞかぬあたりに煙つてゐた
かつてこの地上にあつた熱情は
遠く冷く
白日のもとに壊滅し
われらの正しいとした精神は
まのあたりぐうつと息をのんで

白々しい力が悠々と
パイプをくはへてゐた
よしそれは空しい情熱であつたにもせよ
私は何物をもはゞからず
その中に生きた
よしそれははかない道化であつたにもせよ
私は自由意志で
潔くこのいのちをかけた舞台だつた
とりかへしがつかぬ故に
もはや及ばぬが故に
悲哀いよいよ切なく
傷心いよいよ限りなく
くりかへしくりかへし嚙みしめて
私は毎日海を見てくらした

動かぬ戎克が
いつの間にか向うの島にかくれて了ふ
私のこの嗚咽は
いつか遠い水平線に消えて行くだらうか

さくら

昭和廿二年四月

山かは越えて
みちのくに
夕ぐれ春は
はだ寒し
ま近く見ゆる
丘ふもと
かぐろき松に
かこまれて
白く明るく

浮びづる
あゝ一團の
山ざくら

合歓木

昭和廿二年四月

きりげなく行つて了ふ人
この地上ではもう二度と逢へない——
そのことをお互にはつきり知つてゐる人
幾たびより添ひ
いく度手を握りしめようと
所詮むなしいくりごとだ
さよなら
私はとめない
あたりはしんとして風もないのに

合歓木の葉が一とところ首をふつてゐる
私は私の墓のなかから
この風景をくりかへし見ることだらう
そしてどこだかわからぬ
その人の墓のあたりを想ひ描いて
遠いはるかなへだたりを
今よりも
別れて行く今よりも
もつともつと切なく感ずるだらう

街角

昭和廿二年五月

私は今その街角に立つてゐる
埃つぽい夕暮なのだが
目の前を通るたくさんの人の中に
その人が歩いてゐるやうな氣がして
私はじつとその街角に立つてゐるのだ
不思議な街で
まばらに建つたバラックは
人の背よりも低く
はげちよろの舗道の上を

うすら寒い風がはつてゐる
人通りは多いのだが
それ故却つて妙に佗しい
案の定
ゐる筈のない人はゐないのだ
昔の日にも
この街角で待つたのだが
その人はつひに現はれなかつた
それでもその時は
じつと立つてゐる私の眼に
遠い街の灯が水々しくまたたいて
黒い六月の夜空に
楊の綿は雪のやうに舞つてゐた
それから後いく度

楓や楊の葉蔭涼しい
この街角を想ひしのんだことだらう
どんな遠い地上の涯にあつた時でも
もう一度
この街角に来て待てば
その人にきつと逢へるやうな氣がして
つい三十年の年月を過してしまつた
それ以来現身では今はじめて
この街角に立つてゐるのだが
この埃つぽい夕暮
このたくさんの人通り
たとへこれはその街角には違ひなくとも
もはや来ぬ人は来ないと決つた
ゐない人はゐないと決つた

でも私はたち去れない
よしその人はゐなくとも
その人の娘さん――あるのかないのか知らぬが
その娘さんは歩いてゐるかも知らぬ
しかし
その娘さんに
一体私はなんと挨拶したらいゝのだ
見渡すかぎりの焼跡が
すうつと後ずさりして行く――
私はこゝろの底に
何かとりかへしのつかぬことをして了つたやうな氣もするのだが
もうしばらく
この夕暮の風景を見てゐよう

あゝみんな

昭和廿二年六月

白いつつじ
あかいばら
うすむらさきの
ばれいしよの花
あゝみんな
雨にぬれてゐる

はつ夏

昭和廿二年六月

かしこ
桐の花
ほの蒼く
水に映り
ひとりなる
この身をつゝむ
つゝどりの聲

昔日

昭和廿二年九月

道みち
木苺を喰(は)み
すひかずらの香りにふれ
私は六月の野を歩いた
それから
幾たびかいくたびか
六月がめぐつてくるたび毎に
木苺は紅く實り
すひかずらの花は白く匂ふだらうが

つひに私には
昔日
私の歩いた野原が見あたらない

流れ

昭和廿二年十月

さ霧ながれ
しろく流れ
梢
こまかに
いまぢり
こまかきまゝに
霧にかくれ
しめりつゝ
いたはりあひ

佗しや
うつせみ
かなたへ
流れ行くなり

しらぬ人

しらぬ人が
むづかしい顔をして
こゝはどこですか
とたづねたから
秋風の中です
とこたへた
すると私達はお互に
落葉ですねと
佗しくほゝえんで
行つてしまつた

昭和廿五年十二月

瞳

昭和廿八年十一月

この黝いひとみは
人を信じ
たよる可きものにたよることを知る——
素直な心のその窓です
じいつとごらんなさい
このうるんだ
なごやかな泉の奥に
貧しいけれど
北風の中に暖く育ち

おのづと培はれた
やさしいこゝろ根のうちにも
おのれをしつかりさゝへてゐる
しんの強さもうかゞはれます

黄すげ

昭和廿九年八月

・

しなの高原霧ながれ
徑は黄すげの花明り
つめたく映ゆる燈台よ
しづかにゆるるものもあり

・

きすげの花のいろ淡く
素娥のなげきにかも肖たる
ありとしてもなき匂ひさへ

咲きていのちの尊しや

・

花のいのちは短くて
ひとりを生くるいとしさよ
燃えて冷き花びらの
かすかにゆるる黄菅草

・

すきも透らむ花いろの
うすきがまゝに霧にぬれ
この朝明けのたまゆらを
たか原に佇ちて寂かなり

「昔日」上木記

——跋に代へて——

昨年の秋だつたと思ふ。一日私は中込旻氏を甲州青柳のお宅に訪ね、その夜同家の銘酒春鶯囀の美味を例の如く味ひ乍ら、書や美術のことについて話して居るうちに、談、たまたま詩のことに及ぶと旻氏は「詩と言へば」と言つて一篇の詩を私に示した。

私は何心なくその詩を手にとつて一讀するや、そのなみなみならぬ詩品であるに驚き、「これはどなたのです」と聞いたものである。

「いや僕の旧い友達のですよ」

「旧い友達つて何といふ方です」

私の話気の異常さにやや驚き乍ら旻氏は

「守屋主一郎といふのですがね、どうかしましたか」

「守屋主一郎？　聞いたことがないですね、どんな人です」

「どんな人つて中学時代の級友で、実業家ですよ」

「へエー、それでわかい時、誰に師事したのでせう」
「誰にも師事しませんよ」
「これは不思議だ、信じられませんね」
「といふのは、どういふ意味です」
そこで私は、私の驚きを言はねばならなかつた。それはその一篇の詩を見ただけで、この詩人が当然にわが詩壇に立派に独自の位置を占めるべき詩品を示してゐるのである。
「もつとありませんか」
「ありますよ」
そして私はなほ数編の詩を見せて貰つたが、いよいよ私は確信をもつた。立派な堂々たる詩人である。しかし私がこの詩人の名を知らないことが、私には不審である。何故といふに、この詩人は中込さんと同年といふのであるから、従つて私と同時代である。私は青年時代から詩を作り、且つ詩の批評を書いて来たので、凡そ大正八九年から昭和十一、二年までの日本の詩人で、多少とも才能を示した詩人なら南は琉球台湾の端から、北は北海道樺太の隅まで知らない詩人はないと自信してゐる。その私が知らないといふことは、私には不審である。一たいこの詩人は誰の系統で何処にゐた人であらう。詩風から見れば北原白秋氏の系統に多少似たところもあるが、あの人の結社の中にもこの名の記憶はない。詩格の高さからいつても、どうして

も当時の詩壇にあらはれてゐなければならない。しかし慥かにゐた覚えはない。それなら別なペンネームがあつたらうか、そんな筈はないと晃氏は言ふ。
兎に角、これは私にとつて一つの驚きである。そこでこの驚きを卒直に私は披瀝し、守屋さんに晃氏と寄せ書きでその来歴をたづねる手紙を書いて、その翌日歸京した。
それから二ケ月後、今年になつて再び中込さんを訪ふた。そしてあの手紙の返事について訊くと何とも言つて来ないと言ふ。私は何か一寸不快になつた。何かこちらの批評家的殉情を無視されたやうな気がしたのである。
ところがそれから又二ケ月後、四月になって晃氏を訪ねると、「守屋に逢ひましたよ。そして詩をあづかつて来ましたよ。見て下さい」と言つて一綴りの詩が私の前に置かれた。きくところによると守屋さんは二高時代から詩は書いて来たが、独り書いて来て全く師承はなく、私の称讃の手紙を受取つても何だか自分のことのやうには思へず、それで返事も書かずに失礼してゐたといふのである。更に晃氏が、そんなにすぐれた詩なら、整理して一つ詩集にまとめたらとすすめても、自分ひとりでたのしんで書いて来たものだから、別に世に問ふ気は毛頭ないと言つて相手にもせぬ。
そこで晃氏は、今度は傍らにゐた夫人を説きつけた。「奥さん、兎に角、お出しになった方がいいですよ、守屋君が整理しないならあなたが一つ整理して清書して下さいよ。そして出さ

うぢやありませんか」

この旻氏の友情に夫人が先づ共鳴してその気になられ、そこで今ここに綴られてゐる一冊の詩集となつたといふのである。

私は胸おどる思ひがして、すぐ手にとり、むさぼるやうに讀みはじめた。そして一篇一篇私は私の豫想の全くの的中に会心の微笑をもらさずに居れなかつた。それは実に、ユニークな香気に富んだ作品である。

「豫想どほりですよ。立派なものです。これほどの詩が詩集にならずに、筐底に埋められてしまふといふことはない。出さるべきですよ」

「さうですか、貴方がさう仰有れば出しますよ、出させますよ」

旻氏はうれしさうに力をこめて言つた。

それから二週間ほど後、私は旻氏につれられて、はじめて守屋さんを荻窪のお宅に訪ねた。それまでに旻氏が夫人とともに守屋さんを説きつけて詩集刊行の決意をやつとさせたから、編集装禎等の相談に私にも一役のれとの事である。

その夜のやうな美しい友情の光景を私は見たことはない。私達主賓三人は夫人の心からのもてなしの中に、たのしく和やかな晩餐を共にしながら、この詩集の体裁その他について話し合つた。その結果、守屋さんの意見で、「中込君のすすめでこの詩集はだすのだから、表紙や見

返し、口絵等の絵は中込君の絵でやつて呉れよ」といふことになり、又私には、「この詩集の出るやうになつたキッカケをつくつた人として跋はあなたに願ひますよ」といふことになつたのである。

このやうにしてこの詩集「昔日」は世に出ることになつた。

だからこの詩集は多くの詩集のやうに野心をもつて世に問はうといふやうな詩集ではない。美しい友情の結実が自らにこの詩集になり、縁につながる人々に、その美果をくばらうとするのみである。

だが、この美果の饗宴はたのしい。おそらく人々は私と同じに、春の夕日のやうなやはらかい香気をもつたこのすぐれたユニークな詩人をわれらの詩史の中にもつことをよろこばずには居れないだらう。私自身何よりもその喜びの中にゐる。

いささか本詩集上木の由来をつづつて跋の責をふさぐ。

昭和三十年七月梅雨の将にあがらんとする十日、上石神井の僑居にて

伊福部隆彦

詩集　昔日

著者　守屋主一郎
裝幀　中込晏　印刷　株式會社　東洋社　東京都中央區日本橋茅場町二丁目十番地　昭和三十年十月二十日印刷　昭和三十年十月二十五日發行
【非賣品】